私は『かがみの孤城』を読んで、人は自分と違う悩みを抱えていても、似たような境遇などからお互いに相手を理解し、支え合うことができるのだと感じた。この本を読む前は、「学校に行くことができない」ということについて、どこか簡単に考えてしまっていた。今の社会では、「学校に行けない子」という存在は少なからずいて、よくあることだと考えている部分があった。しかし、この本を読み終わったとき、自分の最初の考えから大きく変わり、学校に行けないという一つの出来事の裏側には、その人にしか分からない苦しさや理由がそれぞれにあるのだと思うようになった。

主人公のこころは、ある出来事をきっかけに学校へ行けなくなってしまう。そんなある日、自分の部屋の鏡が光り、その中にある、「かがみの孤城」に行けるようになる。そこには、こころとおなじように学校に行くことができない子どもたちが集まっていた。最初

はお互いに距離を取っていた七人が、城で過ごす時間の中で少しずつ仲良くなっていく。

私は、こころが最初から他の子たちとすぐに仲良くなるわけではないところが印象に残った。自分の悩みを他人に話すことは簡単ではないし、相手にどう思われるかを考えてしまうからだ。私自身、過去の失敗や友人関係で悩んだことが何度かある。そのとき、私は何故か、恥ずかしいという気持ちになったり、話しづらいなどと考えてしまったりして、すぐに誰かに相談することができなかった。結局、一人で考えているうちに悪い方へと考えてしまっていたことがあった。しかし、後になって友達などに話してみると、何故あの時に「恥ずかしい」や「話しづらい」などと思っていたのかと考えるくらい、自分から話すことができた。また、話したことで気持ちが少し軽くなったことを覚えている。

この経験から私は「悩みを誰かに話すことは自分の弱みではない」と思うようになった。

こころたちも、最初は自分のことを話せずにいたが、城で一緒に過ごすうちに少しずつ相手を信頼していく。その姿を見て、無理に誰かに自分の悩みを話さなくても、自分が信頼し安心して話せる人が一人でもいることが大切なのだと思った。

私がこの本を読んで特に心に残っていることは、登場人物たちがそれぞれ別の悩みを抱えていたことだ。同じように学校に行くことができないという共通点があっても、その理由や感じている苦しさは一人一人違う。私はこの本を読むまで、自分と似た経験をした人ならば、その人の気持ちもきっと分かるだろうと思っていた。しかし、同じような経験をしていても、感じ方は人によって違うのだと気づいた。実際に私も、友達が落ち込んでいるとき、自分の勝手な憶測だけで対応していたことがあり、後から本人に聞いてみると、私が考えていた理由とは全く違っていたことがあった。そのとき私は、相手のことを分かっ

たつもりになるのではなく、まず本人に話を聞くことが大切なのだと思った。

　また、「居場所」というものについても考えさせられた。「かがみの孤城」は七人にとって学校とは違う大切な居場所になっていて、学校でうまくいかなかったことを忘れて仲間と過ごすことができる。私は普段、学校や家、友達との関係の中で、当たり前のように自分の居場所があると思っていた。しかし、もしその場所が苦しいものへと変わったら自分の居場所はどこなのかと考えた。誰にとっても、「ここにいていい」と思える場所があることは、とても大切なのだと思った。

　この作品を読んで一番強く感じたのは、人とのつながりはすぐには見えなくても、誰かの支えになっていることがあるということだ。城で出会った人は、それぞれ別の場所からやってきた。だが、一緒に過ごし笑ったり悩んだりする中で、お互いにとって大切な存在になっていき、その出会いが誰かの人生を変えなっていき、その出会いが誰かの人生を変え

ること

ともあ

るのだ

と思っ

た。

私は

これか

ら高校

生活を

送る中

で、友

人関係

や勉強

、進路

などで

悩むこ

とが増

えると

思う。

そんな

時、自

分だけ

が苦し

いと思

ってし

まうこ

とがあ

るかも

しれな

いが、

この本

の登場

人物た

ちのよ

うに、

表面か

らは分

からな

い悩み

を抱え

ている

人は自

分の周

りにも

いるの

だ。す

ぐに決

めつけ

るので

はなく

、相手

の気持

ちを理

解した

り、想

像でき

たりす

る人に

なりた

い。

『かがみの孤城』は、私たちの身近にある人との関わりや居場所の大切さが描かれてい

て、登場人物たちの言葉や行動について改め

て考えさせられる作品だった。私もこれから

、

周りの人の見えない部分にある気持ちを考え

ながら、困ったときには一人で抱え込まず、

誰かを頼ることを大切にしていきたい。そし

て、自分自身も誰かにとって安心ができ、頼

れる存在になっていけたらと思う。